

論文

小学校と大学の連携による国際理解教育

—教育資源の活用と教員の資質・能力の向上—

帝京大学教育学部 中山京子
海老名市立東柏ヶ谷小学校 東 優也

<要 旨>

本稿では、小学校と大学の連携による国際理解教育の実践を通して、教育資源活用の可能性と教員の資質・能力の向上について論考する。小学校第3学年の児童を対象に、単元「グアム文化体験学習『チャモロってなあに?』」実践した。実践に至る経緯、単元導入の活動やグループ学習、最終活動について示し、実践の全体を概観する。本実践には大学教員と学年担任の教員、大学生、院生、外部講師が関わっている。それぞれの立場や役割からみる協力体制、指導などを通して、教育資源の活用や教員の資質・能力向上に必要な事項について述べる。

<キーワード>

小大連携 国際理解教育 教育資源 チャモロ文化 教員の資質・能力

1. 問題の所在と研究の目的

日本の小学校の教育現場では、研究授業が活発に行われ、教師の子ども理解や授業づくりに研鑽を積んできた。授業の観察と協議会をセットにした「研究授業」は日本の学校教育の文化であると同時に、海外からも注目を浴びている。

一方で、日本の小学校の閉鎖性も指摘されてきた。「開かれた学校/学級」が掲げられるようになり、地域連携や社会教育機関との連携が広がってはきたが、教師の経験に基づくプライドや多忙化により、連携自体もストレス要因になることがある。学問との場である大学との連携は、「研究」と「実践」という垣根により、多くは報告されていない。教職課程を大学で履修する学生も、免許取得に必要な単位を優先す

る傾向が強く、学問的思考が深まらずに視野が狭い学びに陥りやすい。そして卒業後に大学で継続して学ぶ機会は少ない。私学の小学校に就職をすると、人事異動や学校間交流が少なく、自己変革や学び直しの機会が乏しくなる場合もある。

こうした状況の中で、教員は閉じた「学校」という社会で日々を送り、自己の感覚が閉鎖的になっていることに気づかないことがある。そこで、研究的な資源を有する大学や大学教員は、小学校と連携することで、研究成果を教員や子どもに還元し、研究と実践をつなぐことが求められる。教員の現場経験を踏まえた学び直しの機会を作ることで、子どもの学びを活性化させ、教員の資質・能力の向上につながるのではないか。

本稿では、帝京大学小学校と帝京大学教育学部中山研究室の連携による国際理解教育の実践を通して、小学校と大学の連携（以下、小大連携）による教育資源活用の可能性と教員の資質・能力の向上について論考する。

2. 小大連携に関する先行研究

小大連携研究として、藤原孝章・長瀬拓也（2018）「大学生と小学生の協同的な学習による主権者意識の向上について－選挙体験ワークショップの取り組みから－」、松尾諭・及川久遠・眞田篤（2017）「学校理科教育における小大連携の試み」、田部俊充・加藤美由紀（2013）「小大連携による環境教育研究の取り組み－生物多様性の理解－」などがある。このように、環境教育、英語教育、キャリア教育、特別支援教育、音楽教育、理科教育などの分野で先行研究がいくつ報告されている。国際理解教育の分野においては、数少ない事例として、片岡義順（2009）『『アジアシリーズ』の成果と課題－和光大学と岡上小学校の連携を通して－』や、荒尾浩子（2009）「英語活動によるエコ学習」が報告されている。片岡（2009）は、同地域にある和光大学との連携を生かしながら、地域在住のアジア人を教室に招き、食をテーマにした国際理解教育の実践を報告している。荒尾（2009）は、小学生を大学に招き、大学生がエコロジーをテーマにした英語学習活動を行う事例が報告している。前者は小学校教員が中心となり大学研究機関の支援を得た実践であり、後者は大学生が媒体となった実践である。また、桜美林大学では、「草の根国際理解教育支援プロジェクト」を1997年から実施し、小学校にもヒト・モノを派遣している。

実践にかかわる先行研究として、中山京子（2016）「小大連携を活かした国際理解教育実践－ポストコロニアルな視点にたったグアム先住民学習－」、居城勝彦・東優也・中山京子（2017）「グアムと日本をつなぐ教育実践－ポストコロ

ニアルな視点にたった小学校における先住民学習の実践－」がある。これらはいずれも、グアムを事例にしながら、小学生に文化理解やポストコロニアルの視点をどのように伝えられるかをテーマにし、教育資源の活用や教員の資質・能力を主眼には置いていなかった。

そこで本実践では、小大連携を通して大学教員が持つ教育資源を活用する意義と、実践を通して教員の資質・能力を育成することができるかという点に着目する。

3. 教育資源の活用と本実践の参加者

大学には多様な教育利用が可能な資源（以下、教育資源）が存在するが、小大連携においては、小学校に大学側から何かを提供すること、出向くことの方が現実的である。その提供可能なものとしては、大学の教員、つまり研究者の知見や、研究者が所有する具体物がある。歴史学者の手元には貴重な資料やレプリカがあるだろう。科学者の手元には学校の理科室にはないものがあるだろう。文化人類学者の手元には博物館に所蔵されるようなモノがある。それらを解説する知見が研究者にはある。文部科学省は、こうした大学の研究者の知見などを子どもたちに提供するべく、科学研究費による「ひらめき★ときめきサイエンス」を実施している。これは、大学や研究機関で「科研費」により行われている最先端の研究成果に、小学5・6年生～高校生が、直に見る、聞く、触れることで、科学のおもしろさを感じるためのプログラムである。このように大学と学校の距離を近づかせるための努力も行われている。

国際理解教育と文化人類学を研究している筆者は、2020年度「ひらめき★ときめきサイエンス」において、『『人種』はいくつ？地球儀を使った旅と身体表現を通じてヒトの営みを考えよう！』を実施した。その際、科研費を活用して、地球儀、児童図書、児童用パレオ（太平洋諸島の人々が身につける布）などを購入し、実際の

講座でそれらを使用した。そうした教材を更に活用して学校教育現場と連携することで、実践をしやすくなり、研究資源や知見が子どもや教師に届く。次節に述べる国際理解教育実践では、マリアナ諸島グアム及びグアム先住民族チャモロに関する専門的知識と、所有する資料および教材を教育活動に提供した。

本実践への参加者は帝京大学を中心としたネットワークで繋がっている。この実践において、筆者の中山は、授業者とコーディネーターを兼ね、東は小学校外国語教育を専門とし、本プログラムではグループ別の探究場面で外部講師として参加し、「言語」グループの授業を担当した。東は帝京大学教育学部卒業生である。参加者は以下のとおりである。(実践当時)

遠藤教諭：帝京大学教育学部卒業生、帝京大学小学校教諭、本実践の企画・構想者。

中野教諭：帝京大学教育学部卒業生、帝京大学小学校教諭、科目「探求」（「総合的な学習の時間」）担当

野田さん：帝京大学教育学部卒業生、教職大学院2年、来年度より東京都小学校教員。グループ別の探究では「文化」（食文化・物語）の授業を担当した。

小野さん：学部3年生、英語教員を目指す。東に学びながら、帝京大学小学校の英語担当教諭と言語グループの指導に当たった。

他、教育学部3年生2人、4年生2人：教員とともに各グループに入り学習活動の支援を行なった。遠藤教諭・野田さん、小野さん、学生は、中山や東とともに国際理解教育を学び、異文化理解や国際交流活動としてグアムにスタディツアーに出かけている。今回、遠藤教諭は学生時代のチャモロ文化接触体験を、学校教育現場に生かし、「研究」と「実践」を繋げることに挑戦した。

参加者全員が「国際理解教育」「グアム」「チャモロ」「帝京大学」のネットワークで繋がっている。中野教諭だけは、帝京大学卒業生であることの他に共通点はない。

4. 本実践の概要

4.1 本実践の実施に至る経緯と目標

帝京大学小学校元校長の「小大連携による異文化交流活動を何かできないだろうか」という相談から始まり、2014年度より以下の出張授業を行ってきた。

2014年度 チャモロダンスの専門家フランク・ラボン氏と学校訪問、国際交流活動を実施
2015年度 チャモロ文化実践者、トニー・マントノーニャ氏と学校訪問、国際交流活動を実施

2016年度 学生と中山によるチャモロダンスショー、貝を使ったワークショップを実施

2017年度 ワorkshopおよび大学総合博物館展示に招いてチャモロ文化体験を実施

2018・2019年度は休止

2017年度で出張授業を休止した理由は、国際理解教育として帝京大学小学校の教員と連携を図り、教員の学びの場とすることを期待したが、連携をする余裕がなく、「飛び込み授業」感が強く、意義を見いだすことができなくなったためである。しかし、2020年4月に遠藤教諭により、本格的な連携にもとづいてチャモロ文化に触れる異文化体験・国際理解実践を科目「探求」の時間に学年で取り組みたい意思が示された。そこで、4月に、副校長、担当教諭らと打ち合わせを開き、「これまでのものが単発的であったことから今度は深みを持たせたい。国際理解の活動として、カリキュラムに位置付けられないか。今年は学年担当の教員配置やその他の環境がよく、実践を行うチャンスである」という共通理解を図った。10月の打ち合わせでは、学年の「探求」を担当する中野教諭から、「未知なるものと出会い、日常にないものに接触する機会、この活動を通して、調べる、わかった、達成感を味わわせたい」という願いが示された。

そこで、単元「グアム文化体験学習『チャモロってなあに？』」（対象：3年生52名）が設定された。単元目標は、①グアム文化について知

り、体験することを通して、外国の文化に対する関心や尊重しようとする態度を育てる、②自分が決定したテーマについて探究していくことを通して、興味をもったことを追究しようとする姿勢を育てる、と中野・遠藤教諭によって設定された。

4.2 本実践の単元計画と展開

単元の展開概略は以下である。

<1次>3時間

- ・チャモロダンスを見て体験することを通して、グアムという島やチャモロ文化に関心をもつ。

- ・調べたいことを出し合い、探究活動のためのテーマ別グループをつくる。

<2次>5時間

- ・テーマ「ダンス」「音楽」「文化（食と物語）」「身につけるもの」「言葉」毎に別れて、調べる。
- ・調べたことを整理して、発表の準備をする。

<3次>3時間

- ・みんなで伝え合う発表会をする。
- ・ふりかえりの感想を書く。

4.3 グループごとの探究の展開

以下にグループ別探究学習の詳細を示す。

ダンス・音楽グループ（授業者・指導案作成：遠藤）

2021年1月14日

評価：自分で選んだテーマ（ダンスや歌）について関心をもって異文化の身体表現を楽しみながら（態度）、チャモロダンスの動きの意味や音楽の特徴について理解し（知・技）、歌や踊りで表現したりする（思・判・表）。

展開

	ねらい	主な学習活動（問いかけと子どもの思考）	準備物・評価
5限 深める 1	<p><ダンス> 前時で取り組んだ踊りをもとにチャモロダンスの動きの意味を意識しながら踊る。</p> <p><音楽> 歌詞の意味を考えたり、リズムをとったりして音楽を楽しむ。</p>	<p>○はじめにパレオを身に付け、意識を学習に向ける。</p> <p>・前時で見たやつだ。 ・1枚の布なんだね。</p> <p>○歌詞を見て歌の意味をふり返る。</p> <p>・左目が月で右目が太陽 など</p> <p><ダンス> ○意味をもとに振り付けを思い出す。</p> <p>・昔のチャモロの男の人が動物や魚をつかまえるために持っていた棒をダンスで使うんだね。</p> <p><音楽> ○ジャンベを取り入れリズムをとりながら歌う。</p> <p>○音楽と踊りで合わせて、ふり返る。</p> <p>・月と太陽の形に気をつけて踊った。</p>	<p>・冒頭に自己紹介</p> <p>☑「フウナザンブタン」の歌詞（拡大）、配布用歌詞カード、トゥナス</p> <p>☑ジャンベ（大学から5つ）</p> <p>・歌と踊りでテンポを合わせられるように気をつける。</p> <p>☑動きや歌の意味に気をつけながら踊ったり歌ったりする。（思・判・表）</p>
6限 深める 2	<p>テンポの良い曲に合わせた動きやリズムであることに気づき、歌ったり踊ったりする。</p>	<p>○歌詞をもとに意味をふりかえる</p> <p>・鳥が出てくる。 ・船をこいでいた。</p> <p><ダンス> ○歌詞の意味を考えながら振り付けを確認する。</p> <p>・鳥の動きは羽を動かすようにする。</p> <p>・海はどうやって踊るんだっけ。</p> <p><音楽> ○フレーズごとにリズムをとりながら歌う。</p> <p>・フウナザンブタンと同じ言葉が出てきている。</p> <p>○ジャンベやギターが外国から入ってきた物であることを知る。</p> <p>○音楽と踊りで合わせて、ふり返る。</p> <p>・フウナザンブタンと同じ動きがある。</p> <p>○今日の活動のふり返り（ワークシート記入）</p>	<p>☑「トゥレットティ」の歌詞（拡大版）、トゥナス</p> <p>・フウナとはテンポの速さが違うことを意識しながら踊る。</p> <p>☑ギター、ジャンベ</p> <p>・ギターの速さに合わせられるようにリズムをとって歌う。</p> <p>☑曲のテンポが違うことを理解して歌ったり踊ったりしている。（知・技）</p>

2021年1月21日

目標：踊りや歌の練習をもとにどうしたら上手に踊れるか考え（思・判・表）、発表に向けて準備を進んで行う（態度）。

	ねらい	主な学習活動	準備物・評価
5 限 深 め る 3	踊り歌の練習をふりかえりながら細かい動きの違いを意識して踊る。 歌詞の意味や曲調を考えて歌う。	○フウナ、トゥレットティの歌と踊りを繰り返る。 ○歌詞の意味から「こだわりポイント」を見つける。 ・鳥の動きを飛んでるようにするとカッコいいかも。 ・フウナは元気よりも力強い方がカッコいいかも。 ○こだわりポイントに気をつけながら合わせて発表。 ・今までよりも曲の雰囲気伝わってくるかも。 ○雰囲気に気をつけて新曲「ハファデイ」を聞き、歌う。	☑歌詞カード（拡大版・個人用）・トゥナス、ギター、ジャンベ ・こだわりポイントを二つ決め赤く線を引く。 ☑こだわりポイントを意識して歌ったり踊ったりする。（思・判・表）
6 限 ま と め る	発表に向けて自分の「こだわりポイント」や隊形に気をつけながら練習する。	○発表の隊形を話し合って決める。 ・ダンスグループが中心に来るといいと思う。 ・ハファデイは踊りがないから音楽チームを中心に。 ○「こだわりポイント」やそれぞれの曲で気をつけたことをまとめる。 ○気をつけたいことや隊形に気をつけながら練習する。 ○今日の活動のふり返り（ワークシート記入）	☑ワークシート（ダンス用、音楽用） ☑発表会をイメージして友達と相談しながら準備を進めることができる。（態度）

文化（物語・食）グループ（授業者・指導案作成：野田）

評価：チャモロの昔話や物語、食文化を学ぶことを通して（知・技）、チャモロ文化で気付いたことやわかったことを相手に伝えあい（思・判・表）、他のグループの人にもチャモロ文化を伝えることを楽しもうとする態度を養う（態度）。

2021年1月14日

目標：チャモロの昔話や食文化の学習を通して、異文化に触れることや違いを楽しむ。

展開

	ねらい	主な学習活動・問いかけと子どもの思考	準備物・評価
5 限 出 会 う 1 調 べ る 1	チャモロの昔話や物語を知り、異文化に触れる楽しむ	○チャモロの昔話を聞く。 ・フウナとプンタンの話はみんなで踊ったやつだ。 ・水牛と牛が皮を脱いで水遊びするなんて面白い。 ○なんで、このような話があるのか。 ・水牛や他の動物はどこから来たのかな。 ・この話はいつごろから伝わったのかな。 ○地球儀で水牛や他の動物がどこから来たのか確認する。 ・こんなに遠くから来ていたのか。 ・グアムに元からいたんじゃないのか。 （○日本でも同じような昔話はある） ・お話は国が違っても同じものがあるんだ。	☑グアムの昔話の冊子 ☑昔話を聞いて、異文化の楽しさを言葉や文にして表現することができる（思・判・表）。 ☑地球儀、日本の昔話の本 ・日本神話とグアム創世物語が似ていることを押さえる。

6 限 出 会 う 2 調 べ る 2	<p>チャモロの食文化を知り、異文化に触れる楽しむ</p>	<p>○チャモロの食事を見てみよう。 ・赤いご飯は何使っているのかな（赤飯の話も） ・チャモロの人はココナッツを使っているのかな。 ○実際のチャモロ料理を触ってみる。 ・酸っぱいにおいがする。 ・赤い色はここから来ているのか。 ・ココナッツってなんでも使えるのか。 ○なんでグアムの人々はBBQやチキンケラグエン、ココナッツが好きなのかわかる歌詞や写真を見る。 ・チキンケラグエン、ココナッツが好きな理由は歌の中にも歌われているんだ。 ○この道具はなんだろう？（カムズを見て、使い方を考える） ・とんがっているところで削ったり、掘ったりする。 ・いつぐらいから使われているんだろう。 （○日本とつながりがあるワサビやダイゴの写真を見て、なぜ食文化が変わったのか知る） ・なんで日本の食べ物があるの。 ○発表に向けて2つのチームに分かれることを知り、どちらにするのか考える。 ○今日のふり返り（ワークシートに記入）</p>	<p>☑️チャモロ料理の写真・アチョーテのご飯・アチョーテの種・チキンケラグエン ・ココナッツは日本にとっての醤油に近いこと知ること で共通していることに気づく。 準歌詞カード、スタディーツアー食事の写真 ・ココナッツがいろいろな商品に使われていることがわかるように見せる。 評日本と共通することや違うことに気づき異文化に触れる面白さを楽しむ。(態度)</p> <p>☑️日本統治の写真 ・各国に統治されていた歴史を話す。</p>
--	-------------------------------	---	---

2021年1月21日

目標：チャモロの物語や食文化について学んだことをどのように伝えるか考え、発表の準備をしようとしている

	ねらい	○主な学習活動 ・問いかけと子どもの思考	準備物・評価
5 限 深 め る	<p>相手に伝わる発表する方法を考える。</p>	<p>○前回の復習として歌詞カードの歌を聞いて、どのような学習をしたのかふり返る。 ・歌詞の中にブントとフウナが入っている。 ・どうしてカヌーで移動しているのかな。 ○ほかの人たちに面白く伝えられるか考え、準備をする。 昔話チーム ・ペーパーサートを使って演劇しよう。 ・トゥレットイの話からカヌーで来た話も入れよう。 食文化チーム ・写真を見せながら、たべものクイズをしよう。 ・レッドライスの赤い色は何から出ているのでしょうか。 ○チームごとに発表練習</p>	<p>☑️歌詞カード</p> <p>☑️ペーパーサート用の紙、発表用の紙</p> <p>☑️昔話や食文化で学んだことをまとめ、人に伝えようとしている（態度）。</p>
6 限 ま と め る	<p>本番の発表に向けて、準備をする。</p>	<p>○発表会の準備（各チームで発表の練習） ・どんな表情がいいかな・発表の仕方を工夫したい。 ○本番の10分間の発表練習をする。 ・どんな順番がいいかな・楽しんでほしいな。 ○今日のふり返り（ワークシートに記入）</p>	<p>☑️発表会がより良いものにするために準備を行っている（態度）。</p>

言語グループ（授業者・指導案作成：東）

評価：簡単なチャモロ語について聞いたり、話したり、読んだりして理解するとともに、基本的な表現のチャモロ語を用いて自分の気持ちを相手に配慮に配慮して伝えること（知・技）を通して、自他の言語を比べたり、外国語活動での学習を関連づけたりしながらチャモロ語やその物語について気づいたことや考えたことをまとめ（思・判・表）、チャモロ語やチャモロ語を使用する人びとの考え方や価値観について寛容な態度を養う（態度）。

2021年1月14日（木）（授業者：東）

目標：チャモロ語を学習することを通して、チャモロ語やチャモロの人びとの考え方や価値観について考えようとする。

展開

	ねらい	○主な学習活動・問いかけと子どもの思考	準備物・評価
5 限 調 べ る 1	チャモロ語を聞いたり言ったりして、簡単な語彙や基本的な表現にふれ、チャモロ語の特徴や読み方について考える。	○英語とチャモロ語での自己紹介を聞く。 ・英語ではこういう意味だから、チャモロ語では～かな。 ・○○は挨拶、△△は自己紹介をするときの表現だ。 ○言語グループの発表のゴールを知る。 ・自己紹介で言える内容と言え～。 ・他に何を学ぶ必要があるかな。（学びの優先順位） ○チャモロ語の特徴を知る。 ・ローマ字で読めそう。 ・英語と発音が違うところがある。 ・アルファベットと比べるとCやJ,Q,V,W,X,Zがない ・アルファベットの上に○や～がついているものがある。 ○挨拶や基本的な表現を聞いたり言ったりする。（挨拶、名前、出身地、身分、気持ち、感謝の意）	・自己紹介グループとチャモロ語紹介グループに人数が均等になるように分ける。 ☑表現カード、チャモロ語のアルファベット表、ワークシート ☑日本語や英語とチャモロ語を比べながら、特徴や読み方を考えている。（思・判・表）
6 限 調 べ る 2	チャモロ語について考えたり、チャモロ語の歌を聞いたりして、言葉や文化、チャモロの人びとへのまなざしを養う。	○チャモロ語について理解を深める。 ・ローマ字を手掛かりにすれば読むことができる。 ・英語とスペイン語、日本語に似ている。 ・消滅危機言語である。 ○「フウナザンブタン」と「トゥレットティ」の歌詞を見て、気づいたことや不思議に思うこと、感じたことをまとめ、発表する。 ・何回も同じことばが出てくる。・歌とは印象が違う。 ○発表の計画を立てよう ・自己紹介に挑戦してみよう。・朗読に挑戦しよう。 ○今日の活動のふり返り（ワークシート記入） ○1週間の宿題を伝える。（各パートとトゥレットティ1番）	・言語にはもともとの独自性、歴史的背景に見る変化や類似性があることに気づかせる。 ☑2曲の歌詞（拡大） ☑チャモロ語やそれを用いてつくられた物語、歌のよさを考え、チャモロの人びとの考え方や価値観について考えようとしている（態度）

2021年1月21日（木）（授業者小野、指導案作成東、小野加筆）

目標：チャモロ語について学習したことをもとに相手に配慮のある発表について考え、発表の準備をしようとしている。

展開：

	ねらい	主な学習活動（・問いかけと子どもの思考）	準備物・評価
5 限 深 め る	チャモロ語での自己紹介や説明をするときの相手に配慮のある発表の仕方について考える。	○前時の学習の振り返りをする。 ○「トゥレットイ」の朗読をする。 ・「プンタン」と「フウナ」がでてくる。 ○朗読のためのチーム分けを行う。 ・チーム名が歌詞に入ってる。 ・自分のチームの名前はどんな意味かな。 ○自己紹介、チャモロ語紹介のためのチーム分けを行う。	☑発表用ワークシート ☑相手に配慮のある伝え方を考え、チャモロ語での自己紹介やチャモロ語の説明について工夫している。(思・判・表)
6 限 ま と め る	10分の発表に向けて、準備をする。	○相手に配慮のある伝え方について考える。 ・日本語で説明しなくてもチャモロ語だけで伝わる方法はないかな。 ○グループに分かれて、発表の準備をする。 ○2チームが向き合って発表の練習をする。 ・声、聞こえてるかな。・ジェスチャーで伝わってるかな。 ○朗読会の練習をしよう ・どのように紹介したらいいかな。 ○今日の活動のふり返り（ワークシート記入）	☑2曲の歌詞（拡大） * 14日に使用したもの ☑発表会をよりよくするために協働し取り組もうとしている（態度）

身につけるものグループ

授業者・指導案作成：中山京子

2021年1月14日（木）

評価：自分で選んだテーマについて関心をもって（態度）チャモロの人たちの「着るものと飾るもの」について調べ（知・技）、気づいたことを話したり、ワークシートに整理したりする（思・判・表）。

目標：服装の変化や装飾する意味を身につけるものの写真や実物から考え、意見を出し合う。

展開：

	ねらい	主な学習活動（・問いかけと子どもの思考）	準備物・評価
5 限 調 べ る 1	チャモロの人々の服装の移り変わりを写真や実物から調べる。	○写真を見て、何が違うのか、気づいたことを出し合う ・葉っぱをつけている・ドレスを着ている ○古い時代から新しい時代まで、写真と実物を並べ替えてみよう ・昔は、洋服とかなかったと思う。 ・洋服はどこかから入ってきたのかな。 →ワークシートに記録をする。 ○日本でも着るものは変わって来たのかな。 ・昔の人は着物を着ていた。・今は七五三で着たよ。 ・昔と今では違うのは日本もチャモロの人も同じだね。	☑多様な格好のチャモロの写真、ココナツ葉スカート、ドレス、ジーンズなどハンズオン用の実物 ・大まかな歴史を説明し、推測の手がかりにさせる。 ☑並べ替えを通して詳しく見て、気づいたことを話しながら考えを深めることができる。(思・判・表)
6 限 調 べ る 2	装飾の意味について考え、チャモロの人々のアクセサリについて調べ、不思議なことを出し合う。	○人はどうして飾るものをつけるのかな。 ・自慢したい。・おしゃれをしたい。・大事だから。 ○チャモロの人たちが昔から今でも大事にしているものを見てみよう。 ・貝でこんなに作るの、すごいね。 ・どうしてずっと大事にしているのかな ○発表の計画を立てよう ・ファッションショーをやろう！ ・どのスタイルで自分は参加したいかな。 ○今日の活動のふり返り（ワークシート記入）	☑チャモロ・アクセサリーの実物、作成しているグレッグさんの写真。 ☑飾る、大切にするという文化の共通性に気づき、異文化に触れる面白さを楽しむ。(態度) ・服装に合わせた持ち物を確認する。

2021年1月21日（木）

目標：チャモロの人々の身につけるものについて調べたことをもとにどうしたら発表会で楽しく伝えることができるか考え（思・判）、発表の準備を進んですることができる（態度）。

展開：

	ねらい	主な学習活動（・問いかけと子どもの思考）	準備物・評価
5 限 深 め る	ファッションショーで着るものについて説明するためにさらに調べ、実際に着てみる。	○自分が着るものの説明ができるようにしよう ・服装について1人ずつ説明するためにはどうしたらいいかな。説明カードで調べよう。 ・もっと教えてほしい。 ○着てみよう ・外国の人の服を着てウキウキするよ。 ・大事にしないと葉っぱが取れちゃうね。	☑説明カード ☑子供用衣装 ☑服装の特徴を捉えて説明ができるように、自分の言葉で整理する。（知・技）
6 限 ま と め る	10分の発表に向けて、ファッションショーで説明する準備をする。	○ファッションショーを練習してみよう ・何だか楽しい気持ちをお話できたらいいな。 ○歌のカードと合わせて紹介できたらいいね ・フナとプンタンのお話には、この古い葉っぱのスタイルがいいと思う。 ・ハファデイは楽しい感じだから、ドレスで歩きたい。 ○今日の活動のふり返り（ワークシート記入）	☑発表会をイメージして相談しながら準備を進めることができる。（態度） ☑歌詞カード

4.4 子どもの学びの記録

以下にワークシートに記された2次における子どもの学びの抜粋を示す。

はいたりたくあったらデュエンデスがのろいをかけるってぜったいジャングルに入りたくない。

<文化グループより>



写真1：物語をまとめたブックレットを用いて学ぶ。

- ・ちいきで食べもののよびかたがちがったり、とてもおいしそうだったりむかし話がちょっとわかった。あとグアムのいろいろな文化があるんだなあと思いました。あとわくわくがはじめてだったので楽しかったです。
- ・わかい子やちょっと大きい子がジャングルにはいるとデュエンデスはかれらにのろいをかけているのがぞんもん。もしグアムのジャングルに

<歌・ダンスグループより>



写真2：遠藤教諭と意味を確認しながら歌ってみる。

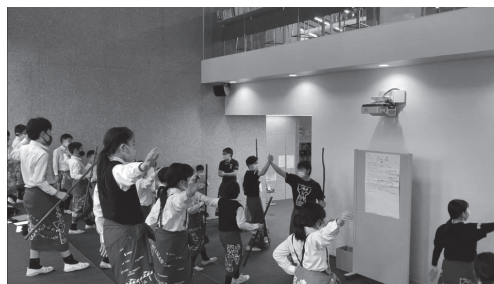


写真3：学生と動きの意味を確認しながら踊ってみる。

- ・さいしょのほうは先生が歌のいみをおしえてくれました。しかも今日はいしょうもきておどりました。あしのうごきと手のふりつけをくみあわせておどるとすごくむずかしくなるのでおどりをおしえてくれた先生たちはすごいと思いました。おどりがおわるとあせがふきだしてきました。
- ・はじめてやったときどういふことばかわかりませんでした。あとこのやりかたとうたいかたがわかりませんでした。でもがんばってやっでできるよになりました。

<身に付けるものグループより>



写真4：学習センターで貝で作られたペンダントを手に取り、筆者中山と自然素材を用いた工芸の価値を考える。

- ・むかしのふくそうはヤシの木の古くなった葉っぱで作り今はぬので作っている。ココナツにおいては木をあらったみたいなおいでさわったかんじはつるつる。ココナツのはっぱで作ったスカート（むかしのふく）はかれていないはっぱをしばりつけて作っている。
- ・アクセサリーは、スパイダーシェルをはんぶんになると上のずのものになる。日本にたった1つしかない。オレンジ色のもので下が一ばん大きくてだんだん小さくなってきている。これをかけると金メダルをかけたみたいな気がする。

<言語グループより>



写真5：外部講師の筆者東とチャモロ語の歴史的背景について学ぶ。

- ・チャモロ語はえい語にてて、スペイン語にもにていて、スペインはグアムをしいたことがあるので、グアムのチャモロ語にていて、日本も少しのあいだだけしいたので、日本語にも少しにていてわかりました。
- ・チャモロ語はローマ字やスペイン、日本のことばがちよくちよくあつてスペインにグアムは333年しいされていたことがわかつた。

5. 実践を通した考察

5.1 教育資源の活用効果

－「学習センター」の設置を通して－

教育資源になるモノは、ハンズオン教材として博物館と学校の博学連携教育の中で重視されている。国際理解教育においても、子どもの気づきを引き出し、探究の姿勢を育て、ものの見方や異文化に接する寛容な姿勢を育てることを大事にしている。そこで、本実践では、普段は教材の保管スペースとなっている空間を利用し、「学習センター」を設置した。アメリカではLearning Centerと呼ばれ、大単元とともに単元に即したハンズオン教材を集めて、子どもの主体的な探究を支援する方法である。本実践では、チャモロ文化に関する楽器、服飾、絵画、カヌーの模型、ココナツの葉で編まれた工芸品、食材、ココナツ殻などを2週間置き、子どもが自由に手に取れるようにした。子どもの視線の高さに何を置くか、空間の照明をどう活かすか、

交流が生まれる動線はどうしたら作れるか、などを検討しながら、教諭や学生とともに設置した。このプロセスは教員や学生の資質能力を高める大事なプロセスである。子どもの姿を想定しながら、実は教員や学生自身がモノと対話しながら異文化理解を図っていると言える。また、学校の空間やスペースをデザインすること、それにより子どもや教員に刺激を与えることができる。じっと空間を眺めて工夫を考えたり、新しい取り組みのアイデアを考えたりする能力も伸ばしたい。

博物館展示では大抵のものは自由に触れることができないが、大学教員個人の所有物であり、教材として準備されたものであることの利点がある。通常学校備品にはない教育資源には、学校の学びの空間をデザインしたり、新たな子どもとの学びを創出したりする効果がある。



写真6：子どもの姿を想定しながら設置する。



写真7：モノに反応して主体的に探究を始める。異文化発見は人が介在しなくても発生する。



写真8：パレオを身につけることで気分や空間を変えることができる。これは現代の民族舞踊に共通する点。遠藤教諭と本物の楽器に触れる面白さを味わう。



写真9：身につける、やってみるといふ身体を通した理解のあり方は代表的な国際理解教育の手法。

5.2 教員の資質・能力の向上と課題

文化（食文化と物語）の探究グループを担当した野田さんは以下のようなふり返りをしている。

「今回行う授業では、児童に探究をさせ、発表することがゴールだった。このゴールがとても難しかった。今までの私はあるものに手を加えて授業を行っていたが、本授業では1から作らなければならないことばかりであった。また、一方的に教え込むのではなく児童から質問や疑問を出させるようにしなければならなかった。

そして授業を終え、児童の感想や授業中の様子からふり返ると初めて出会った教材に疑問や

質問を投げかける様子を見てとることができた。さらに、発表の準備の場面では児童自ら、人に伝えるにはどのような工夫を行うと伝わるのか話し合っている様子も見られた。

一方で課題として挙げられることは、ゴールを意識しすぎて探究的な活動が少なくなってしまうことや児童が発表に対しての意味づけが弱かったのではないかと考える。そのためにも発表を行うために探究を行うのではなく、探究を行って他の児童にも伝えたいような授業展開が行える・考えることができるようにしたい。」

「文化」を子どもが理解するのは難しい。野田さんは当初、どのように「文化」について授業を作って良いか困っていた。それには二つの理由が推測できる。一つは目で見えてわかる具体的なものを手掛かりにする必要がある上、どんな食べ物があるのか、どんなお話があるのか、という子どもの問いについて、教えることができて、「探究」という形で子どもの興味関心にもとづく理解を深めるためには、具体物が必要である。そこで、教育資源として保有する「カムズ」(ココナツの実を削る道具で太平洋や東南アジアで広く使われている)や、アチョーテの種、グアムの物語を翻訳したブックレットなどを提供した。具体的資料と野田さんの支援により子どもの学びが実現した。

もう一つは、教科書、単元にもとづいて授業を組み立てたり、授業をすることは教職大学院での実習で経験を重ねているが、自分でつくる授業、初めから指導案を書く経験が不足していたのである。しかし「総合的な学習の時間」(本実践では「探究」)を運営するには、既存のものを用いた授業だけでは収まらないはずである。「授業を創る」経験と力が資質・能力に求められる。野田さんはふりかえりのコメントにその点についての自覚に言及している。

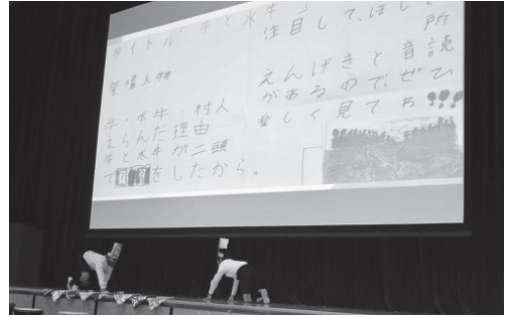


写真10：水牛と牛の物語を工夫して劇化して発表する。

中野教諭は、自身の「探究」科目の運営に疑問を感じていて、子どもたちに調べること、探究をすることの面白さを伝えきれていないのではないかという感覚があったようだ。今回の国際理解教育実践では、これまで経験したことのない授業づくりや指導、準備が求められ、不安が大変大きかった、と言う。探究という科目を担当しているながらも、自身が新しい物事に取り組み探究をすることへの苦手意識もあったようだ。この点については、大学の教員養成のあり方にも課題があるだろう。地域教材を生かした授業づくりや、テーマを設けて総合学習の授業づくりを行う科目はあるが、必修ではない。教科指導法を中心に教科書や既存の単元計画に「少し自分なりに考えて手を加えた」学びを繰り返し、教育現場に出る学生が多い。これでは、新たな教材開発やグローバル社会に求められる現代的な課題に沿った学習づくりには、不安を感じるだけではなく、取り組む思考も持ちにくいであろう。

遠藤教諭は、私学の特性も生かしつつ学年を巻き込み、管理職に話をしながら本実践を展開した。自分が得意とするフィールドや経験を生かしながら、新しい挑戦を子どもとともに展開したいという意欲が湧いた春先からの動きであった。大学を卒業をして5年経ち、経験を重ねて「自分らしい何か」を求める教職のステージである。こうした卒業後の教職ライフを支えることも大学教育学部の社会的使命の一つであ

る。小大連携は、テーマでの連携、人脈による連携、地域による連携など様々な種類があるが、やはりどの連携にもネットワークが機能している。教員養成、教師教育では、人と繋がる力、ネットワークを構築する力、教員個人の得意な分野をもつことが資質・能力として求められる。グローバル化とともに学校にもグローバルな視点、多文化共生の視点、さらにはESD、SDGsという標語なども入り込む中で、基礎的な学習とともにダイナミックな学習活動を計画、推進する力をつけることが必要である。

本実践では、現職教員、教職大学院で学ぶ学生、学部学生、大学教員が集い、打ち合わせを綿密に実施した。打ち合わせは、運営部分はもちろんであるが、理念や考えを共有すること、現職教員が自分の教育哲学を言葉で表現し、自己の持ち味や課題と向き合う時間でもあった。それを学生が聞き、自分の学びのあり方や資質能力を考える機能があった。事前の打ち合わせは対面とビデオ会議システムの両方で繰り返し行い、授業を行った日には振り返りのミーティングを行った。感想の共有に終わらせないように、時には「子どもの実際の学びの姿で授業場面を評価するように」「今日の授業で子どもはどう成長したのか言語化するように」と指示を繰り返すことで、子ども理解のあり方と授業評価を繋げるようにした。また記録を取ることで、授業研究としての積み重ねが生きるようにした。その手法を見せることで、学生が主体的に記録を取ることを申し出たり、子どもの姿を個別具体的に観察して発言したりするようになった。実践記録を写真やビデオで撮ったが、漠然とした撮り方から意図を持った撮影、教育的な場面を捉える撮影の仕方に変化が見られた。これは、通常の大学授業ではできないことで、小大連携による実践的な場において学べることであろう。



写真11：ていねいなミーティングは教員の資質能力向上に効果をもたらす。

5.3 外国語教科化という教育課題に向き合う

小学校での外国語教育は、研究開発学校での先行的な実践から、総合的な学習の時間における国際理解の学習として「英語活動」が始まった。しかし、国際理解とはいえ、英会話の授業が目立ち、教材も英語を教えることに焦点化したものであった。全国的にも実践の多くは「英語の授業」であり、「国際理解＝英語」、「英語ができれば世界を理解できる」というような幻想をつくる状況であった。また、実施状況にばらつきが見られ、教育の機会均等の確保の面からも課題が挙げられた。その点では、中学校で英語学習の接続に不十分であることも指摘された。

その課題を受け、小学校での「教科」ではない「領域」としての必修化が決まった。観点別評価には馴染まないとされ、コミュニケーションへの積極性や言語や文化への気づき、慣れ親しむことを目的に、年間35単位時間行われることになった。学習に対する積極性などある一定の成果が認められた。しかし、原則英語を扱うことが示され、「英語活動」の時代から旧態依然であることや、読み書きの能力における課題が指摘された。また、中学校校との授業スタイルのギャップが大きく、苦手意識の高まりや小中接続という観点からも課題が浮き彫りとなった。

英語教育という点で見ると、近アジア諸国をはじめとする外国と比べ、日本は学習開始時期が遅く、学習量も極めて少ない。外国語活動に

関して寺沢拓敬（2020：150）は、「外国語能力の育成を表向きは目指さず、異文化理解や母語を含めた会話に対する積極性を伸ばすことを目的にするのを、他国の教育課程に見つけることは難しい」と述べる。

他国が「英語教育」を進める一方で、日本の場合、原則英語を指導することを主張しつつ「外国語活動」「外国語科」とすることにズレがある。小学校外国語活動および外国語科の目標には、「外国語によるコミュニケーションの見方・考え方」とある。これは、「外国語で表現し伝え合うため、外国語その背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」とある。小学校外国語教育だけでなく、中学校の外国語科にまで通ずる見方・考え方として示されている。「外国語＝英語」の考えは、言語使用者の数で見れば英語が使える人が多いと、母語の異なる人々同士をつなぐコミュニケーションの道具として活用できるため、理解はできる。指導者や教材の豊かさなどハード面を考慮しても、英語が選ばれることに異論はない。しかし、発達段階を考え、自分とは異なる人々やもの、文化や考え方などに対する感受性の豊かさの寛容、異文化理解、言葉の面白さや気づきを伸ばしたい。

吉村雅仁・秦さやか（2015）は、小学校第5学年を対象に、単元「言語の多様性への気づき」「言語の構造への気づき」を各5時間、計10時間構成で実践した。言語観の見直しや多様な言語や文字との出会いを通して、言語の規則を推測したり、言語圏による傾向性の有無を考えたりして言葉への気づきを与えるものである。言語的多様性に対する開かれた態度の育成、メタ言語能力や言語意識、複言語能力をキーワードとして掲げた。

吉村ら（2015：154）は、「身近に存在する多様な言語の可視化、意識化するためにも、また『教科としての外国語（英語）』の学びを効

率的にするためにも、児童の第1言語、第2言語、外国語を問わず、ことばというものを包括的に捉えられる資質能力をまず育成することが必要」と述べる。外国語活動で外国語の文化や言語への寛容さを体験的な理解を通して行うことで、高学年での外国語科以降での学習に接続することも可能である。

本実践では、チャモロ語を通して、チャモロ文化の理解や言語への興味、歴史的背景について考えることを、日本語や英語で学習した。小学校第3学年国語科で学習するローマ字を手掛かりに、チャモロ語を読むことができることを理解させ、自己紹介やチャモロの物語を読むことを通して、言葉の面白さやそれへの気づき、感性を伸ばすことを意図した。次に、ユネスコが定める「消滅危機言語」の一つであることを紹介し、歴史的背景にアプローチした。スペインやアメリカ、日本の占領による歴史が、言語をはじめとする文化的な習慣を変えたことに気づいたり、話者が少なくなっている根拠を説明したりして、単なるチャモロ語講座でない学習雰囲気教室に広がった。最後に、自己紹介や言語の説明、物語の朗読をゴール活動に設定することで、自分の学習をまとめる方法やそのための学習調整を行い、最後まで粘り強く主体的に取り組む工夫を行った。

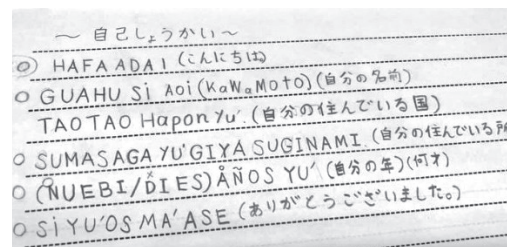


写真12：既習のローマ字を手掛かりにチャモロ語への気づきを深める。

6. 結語

本稿では、国際理解教育の実践を通して、小大連携による教育資源活用の可能性と教員の資

質・能力の向上について論考した。まず、小大連携に関する先行研究には、国際理解教育に関する報告は少ないこと、教育資源の活用や教員の資質・能力を主眼に置くものは報告されてこなかったこと、小大連携を通して大学教員が持つ教育資源を活用することができるかを課題として挙げ、実践を通して教員の資質・能力を育成すること、教員養成のあり方について言及した。

本実践では、大学は中山を中心に研究室が支援体制をとり、小学校側は、探究担当教員である中野教諭を中心に遠藤教諭や学年の教員、授業に関わる教員が支援した。また、外部講師として東が参加し、実践の一部や専門性を生かした関わりを見せた。単元目標を共有し、児童のどのような学びをさせるかを考えることによって、グループごとの学習という体制でも軸となるねらいを意識して取り組むことができた。チャモロ文化と出会い、その一部を体験的に理解し、自らの学びを設定するために、音楽、ダンス、言語、身につけるもの、食べ物という様々な角度から探究した。最終的には、その成果を全体で共有し、自分の学びに責任をもって発信するという一連の流れに児童の学びも深まりを見せた。

特に、教室横に設置した「学習センター」には、児童の目線に合わせ、興味を高めることのできる具体物を置いた。グループの特色を生かし、児童が実際に聞いたり、匂いを嗅いだり、身につけたりして諸感覚を活用しながらモノと出会う工夫をした。普段、何気なく見ている空間も文化を伝える具体物やハンズオン教材を用意することで、異空間に変わる。空間の使い方、モノとの出会わせ方など、チャモロ文化に関する教育資源、教育的効果の高い配置の工夫をし、興味を持ち続けることのできる仕掛けを行った。

教員の資質・向上は、教育現場に出ても求められる。働き方改革によって、無駄を省くことは必要ではあるが、授業をはじめ子どもの学びにつながるものを省くことはしてはならな

い。教師の専門性を磨きつつ、学び続ける教師であり続けることは重要である。教科書にある学習内容を日々こなすのではなく、目の前にいる子どもにどのような力を身につけさせたいかを考え、授業を創る力が必要である。それは、授業だけではなく、目標の設定や評価計画、単元計画、教材教具の選定、外部機関・人材との連携の有無など多様な視点から判断し、児童の学びを構想すべきである。さらに、本実践でも重視してきた実施前後でのミーティングやふり返りをもち、子どもの姿の共有や次時の調整確認を密に行うことで、連携が実現できる。

質の高い教員養成、教員の資質向上は今後も課題となる。それぞれの専門性を生かしつつ、幅広い知見を身につけ、子どもの学びへ還元すべきである。小大連携のあり方はもちろん、単に「イベント」で終わらず、持続可能な教育活動の実現に向け、協力体制を築き上げることも今後の課題である。

引用文献

- 荒尾浩子, 英語活動によるエコ学習, 三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 29, 2009.
- 居城勝彦・東優也・中山京子, グアムと日本をつなぐ教育実践－ポストコロナルな視点にたった小学校における先住民学習の実践－, 東京学芸大学附属学校研究紀要, 44, 2017, 147-157.
- 居城勝彦・中山京子・織田雪江, スタディツアーにおける学びと変容－グアム・スタディツアーを事例に－, 日本国際理解教育学会編『国際理解教育, Vol.20, 2014, pp.51-60.
- 片岡義順, 「アジアシリーズ」の成果と課題－和光大学と岡上小学校の連携を通して－(研究プロジェクト地元小学校における国際理解教育プログラムの実践と効果, 東西南北, 2009.
- 田部俊充・加藤美由紀, 小大連携による環境教育研究の取り組み－生物多様性の理解－,

- 日本女子大学紀要人間社会学部, 24, 2013, pp.63-72。
- 寺沢拓敬, 小学校英語のジレンマ, 岩波新書, 2020。
- 中山京子, 小大連携を活かした国際理解教育実践－ポストコロニアルな視点にたったグアム先住民学習－, 帝京大学教育学部紀要4, 2016, pp.27-24。
- 藤原孝章・長瀬拓也, 大学生と小学生の協同的な学習による主権者意識の向上について－選挙体験ワークショップの取り組みから－, 同志社女子大学現代社会学会現代社会フォーラム, 14, 2018, pp.1-13。
- 松尾諭・及川久遠・眞田篤, 学校理科教育における小大連携の試み, 日本科学教育学会年会論文集, 41(0), 2017, pp.273-274。
- 吉村雅仁・秦さやか, 外国語活動－多言語との出会い：ことばへの目覚め活動－, 日本国際理解教育学会編, 国際理解教育ハンドブック－グローバル・シティズンシップを育む, 明石書店, 2015。